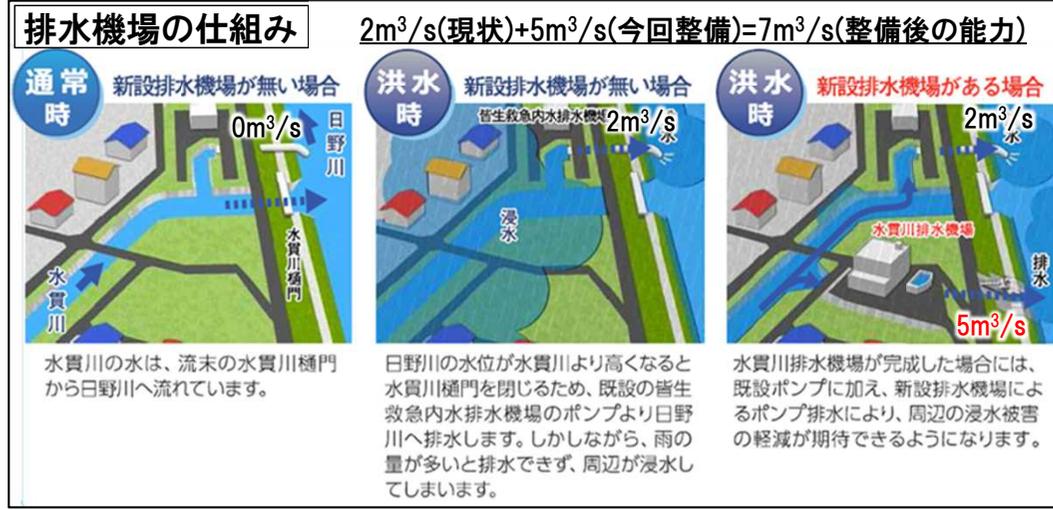


# 集中的な投資で早期の浸水軽減に取り組む「水貫川」排水機場

・水貫川では昭和62年台風19号において過去最大の浸水被害が発生し、その豪雨を契機として比較的小規模な可搬式ポンプを導入し、機動的な対応を図る「救急内水対策事業」により排水機場(2m<sup>3</sup>/s)が整備されている。一方、周辺では市街化により人口が近年集積しており、さらに気候変動による豪雨が予想され、今後、浸水の被害が大きくなる恐れが高まっている。

・このような中、本県では、浸水被害の拡大を防止するため放水路や遊水地も含めた排水方法の検討を行い、さらに経済性や用地取得など実効性の観点から検討を進め、最終的に排水機場による対策を選定して整備を進めている。

・整備内容は、昭和62年台風19号相当の豪雨によっても床上浸水が発生しないことを目標として排水機場の能力を5m<sup>3</sup>/sとし、令和2年度から集中的・機動的に予算を執行する事業メニューを活用して短期集中的に整備を進め、効果の早期発現を目指している。



### 洪水や地震へ備えて確実性を向上

隣接する日野川が氾濫した場合でも、排水機場が水没せず円滑に稼働できるよう機器類を氾濫水位より高い位置に配置している。

また、ボーリング調査において、基礎地盤に軟弱な地層や液状化が発生しやすい地層が確認された。地震時に不同沈下などを引き起こし、排水機場に大きな損傷を及ぼす恐れがあったことから、地震に対しても排水機場の機能が確保できるよう基礎杭の配置や配筋の見直しを行っている。

